

平成29年9月3日 NPO法人 認知行動療法推進協会

現場からの報告

子ども・思春期の症例

奥田朋子

千葉県済生会習志野病院

臨床心理士・社会福祉士・精神保健福祉士

自己紹介

- 病院勤務の傍ら、県内でスクールカウンセラーとして勤務していた経験有り。
- 病院では不登校の児童生徒の相談に応じる機会あり。

不登校に至った理由はそれぞれ

- 具体的理由のある場合（友人関係、家庭関係）
- 理由はあるけどそれで不登校に至ったのかよくわからない場合
- 病気の場合

不登校状態を継続している理由2

- 不登校のきっかけはひとそれぞれ。こんなことで？ということでもきっかけになり得る。
- 原因がわかったとしても解決にはならない。むしろこれからどうしていきたいかを探っていくことが大切。

現場で学んだこと・考えたこと

高校生1

話しかけられても話が出来ない

クラスメートにいろいろいわれているんじゃないか

転校したい



何とか別室登校...



「なぜならば」練習。
日記の勧め

中学が一緒のクラスメートに誘われてカラオケに行けたのをきっかけに学校が楽しくなる。推薦で進学先も決まる。

中学生2

人が怖いから
学校へ行けない。



心配した祖母
が精神科へ連
れてくる

統合失調症と診断された

中学生3

学校に行きたくない



母親と一緒に
病院へ相談

休むことで母と一緒に居られるメリッ
ト？

中学生4

転校してきて学校にな
じめない、行くのが面倒



両親は不在
祖母と同居

両親の存在の大きさを痛感...

中学生5

学校に行くのが面倒



両親は忙しいから学校
サボリ気味
兄弟の面倒で休むことも

両親にかまってもらえない寂しさあり

保護者1

子どもと話すとイライラする。
子どもへの対応を聞きたい

仕事があるので、次の面談の約
束はしません。

対応策相談し
て行動決定

親は行動せず、子どもも変化なし。
信頼関係が築けなかった。



保護者2



家族だけで何とかしようとしたけどらちがあかない。

今までの関わりねぎらう

学校・家と協力して働きかけのタイミングをつかみ、アプローチ。

本人は学校に行き始めた。

保護者3

子どもを刺激したくない。

学校は何もしてくれない。

学校側は保護者と協力して動くこと、子どもとの安定した関わり方を提示するが、保護者に話が的確に伝わらず。



両親は、学校の先生が子どもに接触することを拒否

現状の課題として

- 学校卒業後の支援のつなげ方
- 親への支援も大切
- 地域といかにつながるか、つなげるか

支援で必要なこと

- 本人が学校へ「行く」か「行かない」かのみに注目しすぎない、判断の基準にしない。: 本人も家族も、先生もみんながしんどくなる
- 今やれることに注目していく。: 出来ていないことよりも今から出来ることへ

本人へのアプローチ

- 本人の希望をつかむ
- 好きなこと、強みを伸ばせるよう支援
- (可能であれば)家庭の中での役割を提案

親への支援

- 親の苦勞をねぎらうこと
- 親自身が自分の生活を大切に出来るように
- 子どものことを話せる場所、相談できる場所との橋渡し

彼らに伝えたいCBTスキルとして...

- ①他の人の視点で物事を見る練習
- ②気分が好転しなくても行動することの大切さ
- ③「出来ていること」を見つける練習
- ④問題解決法

おわりに

- どの方向に進むのが望ましいのかは人それぞれ。
- 様々な視点から本人、家族、地域全体を見てみると、新たな方向が発見できるかもしれません。